

花より花らしく

三岸節子は花を愛し、自ら育て、生涯にわたり描き続けました。画業初期には、花は静物画のモチーフのひとつとして描かれ、やがて作家を代表する主題へと昇華されていきました。70年以上の画業の中で描き続けられた花の作品の変遷を、ヨーロッパの風景画とともにご紹介します。

静物画の中の花

1930年代から1940年代において、節子は多くの室内画・静物画を描きました。《花・果実》は、節子が春陽会から離れて独立美術協会に移って初めて出品、入賞した1932(昭和7)年の作品です。日常の生活の一部が切り取られたようなこの空間には、身近なものへの節子の優しい眼差しが感じられます。描かれているのは、鮮やかな黄色のテーブル、その上の赤い林檎が載った白の小皿、二つの林檎、深緑の布と白い花の活けてある花瓶。背景の朱色の布地は、画面全体を温かく包み、布に描かれている黒の模様は、空間全体を引き締めています。平面的な空間処理、大胆な筆触、濃厚な色彩などフォービズムの影響を感じさせる作品です。本作品は、《花・果実》と題されていますが、花は作品の主題というよりも、温かみのある室内空間を作り出すための造形的な要素のひとつとなっています。



《花・果実》1932年 ©MIGISHI

1950年代の花

1940年代後半になると、花は静物画の中の造形要素のひとつとしてではなく、節子の代名詞となる重要なモチーフとして描かれるようになり、花と壺だけで構成したスタイルが定番となります。1952(昭和27)年の《花》には、花全体の形態のみならず花弁、茎、葉などが、軽やかなタッチで描き込まれており、花一輪ずつの形や花の各部位にも作家の関心が見て取れます。花に加えて目を引くのが、画面の下半分に描かれた丸みを帯びた壺。口の部分と胴体に引かれた逆三角形の太く黒い線は、花の生彩さや軽やかさを際立たせるとともに画面全体を引き締めています。



《花》1952年 ©MIGISHI

1970年以降の花

節子の花は時代を追うごとに輪郭を示す線も形も失われ、抽象化していきます。多くの場合、花は、赤、黄、白といった一つの色の塊として表現され、何層も塗り重ねられることで独特のマチエールが生み出されています。絵の具の質感と鮮やかな色彩によって描かれた花は、写実から離れ、心象的ともいえる花となっています。節子は、自身の描く花を「私自身の創作の花」と言い、次のように説明しています。

「結局、花そのものがあまりに美しすぎるんですよ。私がバラならバラをそのままに描いても本物の花の美しさにはとてもかないません。ですから、つい、何の花という固定したものではなく、一度自分の中で消化して私自身の創作の花を描くわけです。一種の造物主とでも、申しませうか。」(*1)



《花(黄色)》1971年 ©MIGISHI

最晩年に描いた花

1998(平成10)年、亡くなる一年前に描かれた《さいたさいたさくらがさいた》は、「花」の作品の集大成であると同時に、節子の画業の集大成ともいえる作品です。当美術館のために制作したこの大作には、若いころは描けなかったという桜の木の「美しさ」と「怖さ」がみごとに表現されています(*2)。もはや絵筆を持つ力さえなく、腕に巻き付けた布に絵の具をつけて描かれたといわれていますが、薄い絵の具の重ね塗りで表現された桜の花は、大きな渦を巻いて画面いっぱい広がっています。桜の存在感や生命力の凄さを感じさせる作品ですが、画面下方に滴る絵の具の跡は、渾身の力を振り絞ってキャンバスと対峙する作家の姿を彷彿とさせます。節子は、花の絵に込めた思いを次のように記しています。

「ただ、美しい花を、あるがままにうつしとるのでは、花のもつ不思議さも、生命も、画面に見出すことは困難でせう。いかほど迫真の技術を駆使しえても、ほんものの、一茎の花に劣りませう。花よりもいつそう花らしい、花の生命を生まなくては、花の実体をつかんで、画面に定着しなければ、花の作品は生まれません。つまり私の描きたいと念願するところの花は、私じしんのみた、感じた、表現した、私の分身の花です。この花に永遠を封じこめたのです。」(*3)

永遠の生命を封じ込められた桜の花は、節子の分身となり、今日も生まれ故郷で咲き誇っています。

(*1) 三岸節子『三岸節子 華』求龍堂、1998年、P82

(*2) 吉武輝子・聞き書き『炎の画家 三岸節子』文藝春秋、1999年、P379

(*3) 三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年、P57